

筆作る

熊野筆伝統工芸士会

人

KUMANOFUDE
Traditional Craftsman

2026

筆作る人

熊野筆伝統工芸士



碓井 真光	Usui Shinko	01
荒谷 城舟	Aratani Jyosyu	03
實森 得全	Sanemori Tokuzen	05
香川 翠皐	Kagawa Suikou	07
小鳥田 晃祐	Kotorida Koyu	09
湊 剛雪	Minato Gosetsu	11
片平 游哲	Katahira Yutetsu	13
實森 得応	Sanemori Tokuo	15
大久保 順敬	Okubo Jyunkei	17
井ノ下 恵峰	Inoshita Keihou	19
篠原 紫香	Sinohara Sikyou	21
中川 聖峰	Nakagawa Seiho	23

熊野が誇る 「筆作る人」

広島県安芸郡熊野町は日本の生産量を誇る筆の都です。この町に住む人のうち約一割が筆の関連産業に従事しており、熊野の暮らしは筆とともにあります。いっても過言ではありません。

筆の材料を商う人、筆を売る人、筆で書く人、描く人……そして、筆を作る人。そんな「筆作る人」の頂点ともいえる存在が「伝統工芸士」です。

筆に関わる仕事は、「筆作り」の伝統が受け継がれてきたからこそ成り立っています。伝統の技術は、一度失われてしまえば二度と手に入りません。私たち熊野筆事業協同組合は、その技を守り継承するため、伝統工芸士の認定や次世代の育成を担ってきました。

彼らの技や思いを伝えることで、次世代の担い手を育てたい。そんな願いを込めてこの冊子を作りました。

戦後の暮らしを支えてくれた
筆がえがき出すもので世界の和が作りた



碓井 真光

Usui Shinko

伝統工芸士認定年月日：1981年12月11日

真光の今

「毛の段階で、どれがどの筆になるかは決まっているんですよ。そうつぶやきながら、皮のついた原毛を素早く丁寧に選り分ける真光氏。

筆の良し悪しは、長さや毛質ごとに毛を選り分ける「選毛」※せんもうを始め、筆作りの初期工程（下仕事）で決まるといいます。

羊毛筆を得意としており、代表作は1950年に発売した「墨吐龍」ぼくどりゅう。柔らかく細い毛がたっぷり墨を吸い、運筆で出てくる墨の量を調節できる玄人好みの筆です。

経験が足りない職人は、さか毛やすれ毛を取る工程で繊細な毛まで取って捨ててしまうので、熟練の技がなければ決してこの

※選毛（せんもう）：原毛から筆に使える良質な毛を選び取る作業

筆はできません。柔らかすぎて使いこなせる書家が限られますが、それだけに根強いファンが多い一品です。

真光の過去

中学校を卒業してすぐに羊毛筆を得意とする工房に就職し、毛の扱い方を学びました。「先輩の技を目で見て盗め」という



時代で苦勞もありましたが、終戦直後で日本中が物資の不足に喘いでいた中、「筆作りの仕事が暮らしを支えてくれました」と振り返ります。

熊野筆が国から伝統的工芸品の認定を受けた1975年には既に十分な経験と技術を持っていましたが、女性であることからすぐには認定試験を受けられませんでした。その逆境に負け

ず、1981年には女性初の伝統工芸士の認定を受けました。「若いころは負けず嫌いだっただもしれませんねえ」と笑う真光氏。男性中心だった筆司の世界に、女性が活躍する足場を一步步ずつ実力で築いてきました。

真光の未来

伝統工芸士に認定されて以来、熊野筆の魅力を伝える活動に力を入れてきました。振興活動でイギリスやアメリカ、フランスなどの諸外国を訪れ、世界の広さを実感したといいます。

通信機器の情報だけでなく「手を動かして筆で文字や絵をかくことで繋がりが生まれ、世界の人の和が作ればいいなと思うんですよ」という言葉には、戦争を経験した世代ならではの重みがあります。

町内の観光施設である「筆の里工房」への花の植え付けや英語標識の導入、後継者育成に向けた教育制度整備など、次世代を見据えさまざまな提案をしてきました。「何十年も経たないと、何事もうまくいきません」。高品質な筆を作りながら草の根の活動を続けることで、筆作りの未来を支えています。



伝統の書筆があつてこそその熊野筆

選毛から作る

「味がいい」筆

城舟の今



荒谷 城舟

Aratani Jyosyu

伝統工芸士認定年月日：1994年2月25日



城舟氏のこだわりは、書き手の書体に徹底して応じる筆作りです。書家本人や書家から注文を受けた筆問屋から、書きたい書体や出したい線について、まずじっくりと話を聞きます。近年では「毛先から少し下にやや腰のある筆」という要望が増えました。細やかに要望に対応するため処理済みの束毛[※]はあまり使わず、毛の下処理から工房で手掛けしています。

年齢を重ねるほど良し悪し
が分かってくるため、筆の生産量は減りましたが、品質には一層磨きがかかっています。さか毛やすれ毛を取る工程では、親指の付け根を何度も毛

※束毛（そくもう）：束ねた状態で仕入れる下処理を済ませた毛

先で撫で、感触を確かめます。「味を確かめようなんです。30年ぐらい続けて、やっと味のいい筆ができるようになるんですよ」と笑います。

城舟の過去

子どものころから筆司だった父を手伝い、筆作りに親しんできた城舟氏。新制中学を卒業し



てすぐ、自宅の工房で働き始めました。当時は若く遊びたい盛りだったので、夜遊びをしては居眠りし、道具の櫛で文字通り叩き起こされたこともあります。当初は父や筆問屋からの指示に納得がいかないこともありましたが、言われたことを素直にこなしていると技術が身に付き仕事が楽しくなってきました。伝統工芸士になったのは50代

ころ。認定から何年か経って、今のうちに「使う人の書体に応じた筆」を意識して作るようになりしました。今は退きましたが長く伝統工芸士会の会長を務めたため、メディアにも何度も登場し、熊野筆のPRに尽力してきました。

城舟の未来

現在は後継者を育成するため筆司会毛筆製造技術研修会で講師を務める城舟氏。化粧筆や画筆ももちろん大切ですが、書筆があつてこそその熊野筆だと考えています。「書道や書筆の魅力が広く伝わり、熊野が発展してほしい」と願いを込めます。今まで多くの弟子に筆作りを指導してきましたが、一人前の筆司になれた人はごくわずかだといいます。10年ほど修行して

やっと、筆司として大成するかが見えてくる職人の世界。好きでなければ続けられません。長年の経験の中で身に付けてきた大切なコツの部分は、後継者として認めた相手にしかなかなか教えられるといえます。研修会で教えている弟子が、一人前に育ってくれることを期待しています。



代々続く筆司の家系で

次世代へ何をどう繋いでいくか



實森 得全

Sanemori Tokuzen

伝統工芸士認定年月日：2000年2月25日

得全の今

「筆の良さは、使ってみないとわかりません。まずは使ってみて、自分に合った筆を選んでほしいですね」と話す得全氏。原料の毛が徐々に手に入りにくくなってきた20年くらい前から、選毛や毛組[※]により工夫を凝らして、その筆本来の書き味を再現するようになりました。ゴルフから魚釣り、野球、ソフトボールまでこなす多趣味で凝り性な性格が、筆作りにも生きています。父からは「筆司が書道をするとは自分好みの筆を作ってしまう」といわれ、使う人に寄り添った筆作りを心がけてきました。細筆から超特大筆までどんなサイズの筆も作りま

※毛組（けぐみ）：選毛で選んだ毛を、量を決めて組み合わせしていく作業

すが、大きな筆は作れる筆司が限られるため、発注がよく入ります。伝統工芸士会の会長としてメディアに出演する機会も多く、PRにも尽力しています。

得全の過去

祖父の代から続く筆工房の家に生まれた得全氏。小学生の得全氏を膝に抱いていた祖父が倒



れてしばらくして亡くなった時、家業を継ぐのが運命だと感じ、将来筆を作ろうと決めました。

筆司になることは意識していましたが、物づくりが好きで高校の機械科を卒業し、大手自動車メーカーに就職。エンジン開発に携わり、一部の工程で改善提案をするなど勤務時代にも妥協せずより良い物づくりに取り組みました。

3年ほどで退職して筆司の道に。父の先代得全は「見て習え」という姿勢で、間違っている時だけ注意を受け、手探りで仕事を身につけたといえます。

当時は伝統工芸士は1軒の家に1人という慣例があり、父が亡くなった2年後に伝統工芸士の認定を受けました。

得全の未来

得全氏の息子は大学卒業後すぐに筆司となり、慣例も変わってきたことから既に伝統工芸士の認定を受け活躍しています。「どんな挑戦をしていくのか楽しみです。私と考え方が違う部分もありますが、息子には自由に挑戦してほしい。父を見習い、できるだけ口出しせず見守っていきたい」と期待を込めます。筆作りの伝統を守るには、使う人を増やしていくことも大切。

多くの人に書道に興味をもってもらえるよう、子どもの頃から筆に親しむ機会を増やす草の根の活動が必要だと考えています。筆作り体験に来た子どもたちは作った筆を「宝物にする」「使わずに飾っておく」といいますが、「筆は書く道具です。使って初めて真価がわかるものなので、ぜひ使ってほしい」と呼びかけています。



子育てがひと段落して手に一生ものの職を
「あの筆が良かった」と言ってもらうために



香川 翠皐

Kagawa Suikou

伝統工芸士認定年月日：2007年2月25日

翠皐の今

翠皐氏の代表作は、伝統工芸士の認定を記念して発売した「緑風^{りよくふう}」です。得意とする柔らかな羊毛に、硬い山馬^{さんば}の毛をほんの少し混ぜた筆で、墨含みがよくほどよい腰があるため「扱いやすい」と今も人気です。水墨画に使う愛好者も少なくありません。

定番商品に加え、天尾[※]にイノシシの毛を混ぜたり、クジヤクやダチョウ、ハクチョウの羽を使った特殊筆を作ったりと、書家の要望に応じて常に新しい挑戦をしてきました。10年ほど修行したころ、ようやくイメージ通りの筆を作る技術が身についてきて、楽しみを見出せるようになった

※天尾（あまお）：馬のしっぽ部分の毛

といいます。
「やればやっただけ反応があり、喜んでもらえる。やりがいがあります」と作業に打ち込みます。

翠阜の過去

実家の母が筆作りの職人で、幼少期から作業を手伝ってきた翠阜氏。物づくりが好きで洋裁



学校に進学し、仕立ての仕事につきました。結婚、出産を経て子育てしながらできる仕事を探し、今も勤める筆の製造会社で35歳で就職。言われるままに動くだけのところから、自分で考えて毛を組み合わせ、見た目や書き味を再現する技術を身に着けました。

周囲からは「工場では工程の一部しか担当しないから、伝統

工芸士になるのは難しい」と言われましたが、「職人を育てよう」という会社の方針もあって見事認定を取得。伝統工芸士としての責任感から、さらに技術が向上したといいます。
「技術は誰も盗る者がおらん」。昔聞いた父の言葉の通り、手に一生ものの職を付けることができました。

翠阜の未来

翠阜氏は今も現役で毎日筆を作りながら、後進の指導に当たっています。女性2人に加え、最近男性が新たに職場に入りました。「仕事は楽しいです。元気な間は身体に気を付けて働きながら、彼らを一人前に育ててあげたい」と意欲を見せます。

小学1年生から書道を教え、小学4年生全員に筆作りの体験

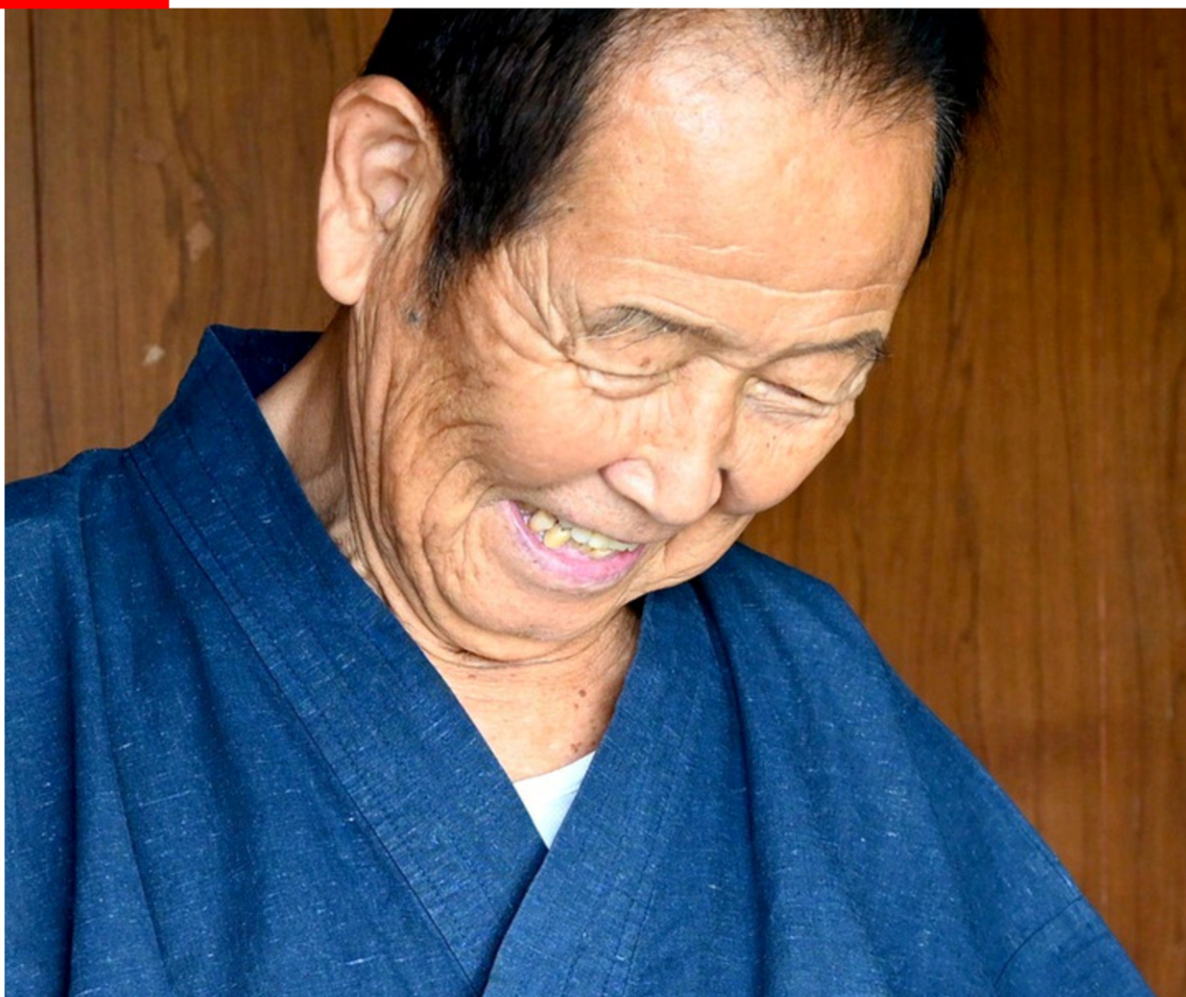
もさせる熊野町。翠阜氏にとっても、筆はずっと身近な存在でした。

「町の人口が減って筆作りの職人も少なくなってきたのはいますが、何とかバランスを取って、熊野筆を中心とした文化をいつまでも残していってほしいです」と願いを込めて話します。



「六十の手習い」から伝統工芸士へ

熊野筆の魅力を広げる使命を胸に



小鳥田 晃祐

Kotorida Koyu

伝統工芸士認定年月日：2007年2月25日

晃祐の今

「筆作りの要は選毛かなめです」と断言する晃祐氏は、堂々とした体格が目を引く大柄な男性です。中学卒業後は相撲や柔道の稽古に励み、相撲で国体に出場。相手と組むスポーツならではの経験が筆作りにも生きていと言います。

状態の悪い毛からはそれなりの筆しかできないため、より良い毛を選び取るための目を養うことが筆司としての成長に欠かせません。

書道の初心者から書家まで扱いやすいイタチ毛の書き味を理想としており、それを再現するための毛や軸の組み合わせに想像力と創造力が必要だと考えます。

「もうちょっと細く、硬く、柔らかくなどのご意見から気持ちを汲み、相手を思いやる心で作る。それを心がけています」と、繊細な作業に打ち込みます。

晃祐の過去

晃祐氏の父は戦時中満州に渡り、シベリアに抑留されて亡くなりました。母は家業の筆作り



をしながら3人の子を育て、長男だった晃祐氏は率先して家事も筆作りも手伝ったといいます。大柄なスポーツマンですが、中学生の時から毛もみや櫛ぬきなどの繊細な基礎作業を毎日こなしてきました。

21歳で大手自動車メーカーに就職して、筆司になる夢のため55歳で退職しました。筆の製造会社でパートタイマーとして入

社し、真面目な働きぶりを評価されて2年目に正社員に登用されました。何十年ぶりの筆作りでしたが、手は昔の作業を覚えていました。尊敬する会社の代表の作り方を、目で見て盗んだといいます。負けず嫌いな性格から人一倍努力し、68歳で伝統工芸士の認定を受けました。

晃祐の未来

地元・熊野町を深く愛しており、「町に貢献できることは何でもしたい」と話す晃祐氏。熊野筆の知名度を上げることが伝統工芸士の大切な使命だと考えており、政財界の著名人にもたくさんの名刺を配り、熊野筆の宣伝に繋がってきました。

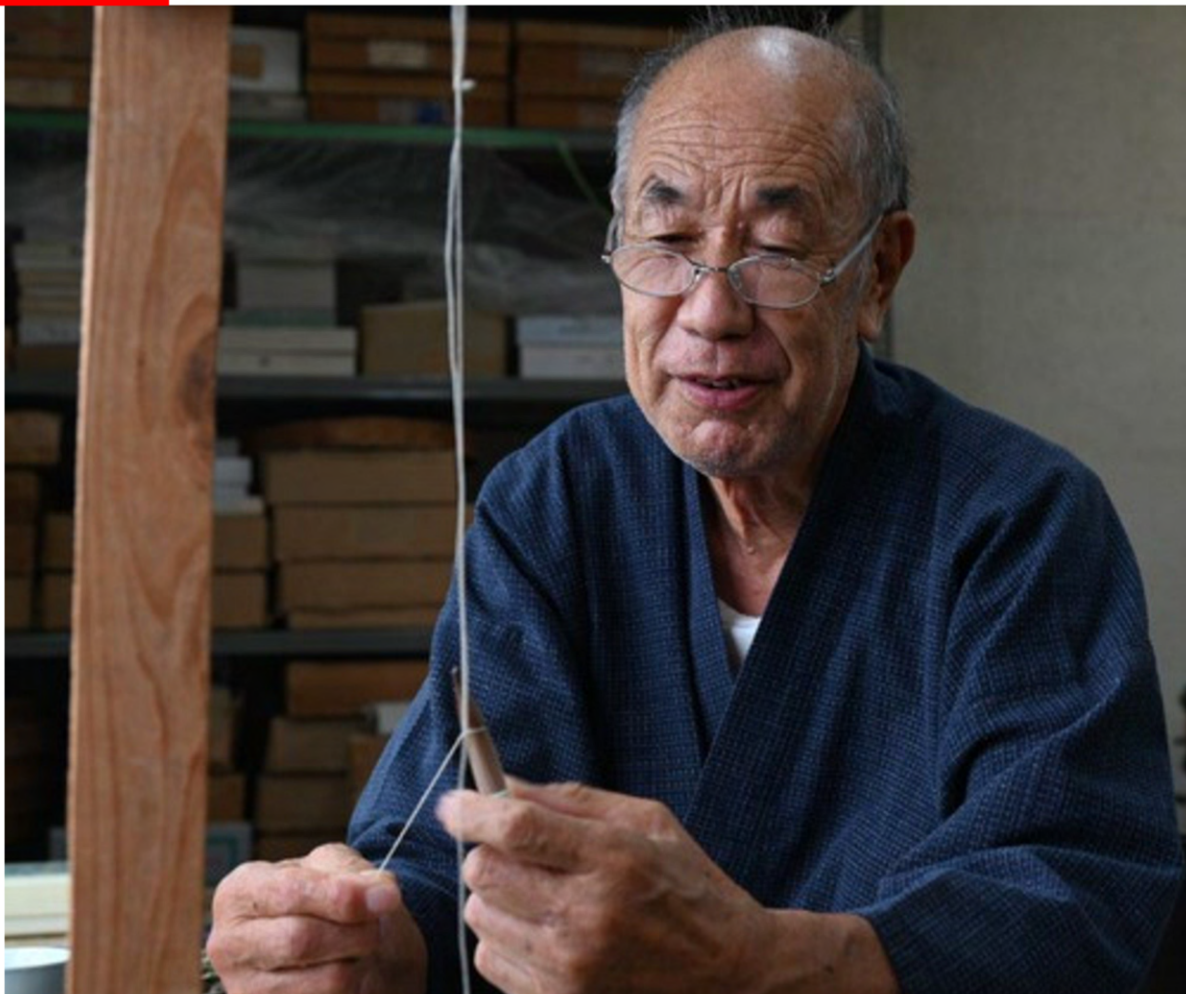
会社の代表と海外に買い付けに行ったり、筆司の仲間と各国で筆文化の振興を図ったりする

中で、世界情勢にも目を向けるようになりました。原料毛が不足する中、人工素材の開発に期待をかけています。これまでの常識にとらわれず、時代に合う方法を探っていくことを提案。「天然毛が手に入らなくなっているから開発しても間に合いません。二歩も三歩も先を考えて動かないと」。今こそ、未来のための変革の時だと考えています。



川尻から熊野へ

産地を跨ぎ筆を作り続けて見えてきたもの



湊 剛雪

Minato Gosetsu

伝統工芸士認定年月日：2008年2月25日



剛雪の今

剛雪氏は基本に忠実に、手を抜かない丁寧な作業で筆を作ります。「最初の毛もみが不十分だと、墨を十分に含みません」。また毛もみした毛束は、必ずよく梳かして切り揃えます。そうすれば必要最小限の毛で美しい形の筆ができますが、毛がもつれたままだと形が乱れ、毛量で調整するため書き味にも影響してしまいます。

筆作りを始めて20年ほど経ったところ、同じく筆司だった父の作業を観察していて気付きました。さらに修行を積んだ40代のころ、「そろそろ一人前になってきたかな」と思っていた矢先にクレームを受

け、改めて「手を抜いてはいけない」と自分を戒めたこともあります。筆作りの工程には一つひとつ意味がある。それを実感しながら丁寧に作業を進めます。

剛雪の過去

広島県内のもう一つの筆の産地・川尻で生まれ育った剛雪氏。中学校を卒業してすぐ、既に修



行を始めていた兄とともに、筆司だった父のもとで筆作りを始めました。休みも一切なく遊びにも行けず、泣きながら父の仕事を目で見て覚える日々。転機が訪れたのは10年後でした。熊野の筆の製造会社から誘われ、思い切って移住。兄も同じ会社で働き始めました。

当時は筆の需要が非常に高く、原料毛の買い付けで世界中を飛

び回ったり、たくさん工場スタッフを指導したりと多方面で活躍したといいます。同時に故郷の父の作業を観察して勉強を続け、一つひとつの工程の大切さなどにも気付いていきました。会社の後押しを受け、50代で伝統工芸士の認定を受けました。

剛雪の未来

「筆作りは自分を育て食べさせてくれた宝です。期待に応える筆を作り続けたい」と話す剛雪氏。伝統工芸士の認定を受けるなど、自分が思っていた以上の成長を遂げることができました。他の産地に修行に行く職人が多い川尻に比べ、地域内の職人が互いに弟子を取り、教え合う熊野の文化。自分を育ててくれた熊野に、職人がもっと増えて栄えていくことを願っています。

これまで教えた弟子の中に「筋がいい」と思った人もいましたが、原毛を選び分ける作業を身に着けるだけでも10年かかるといわれる世界です。毛の量や長さのバランスを整える毛組みを身に着けるには、経験を積みむしかありません。「独り立ちできるかどうかはその人次第。できる人が教えてあげればいい」と次世代に期待をかけます。



かつて憧れた「かつこいい伝統工芸士」の道へ
変わらないために変わり続ける提案



片平 游哲

Katahira Yutetsu

伝統工芸士認定年月日：2013年2月25日

游哲の今

游哲氏が得意とする筆は10種類以上の毛を混ぜ合わせて作る「兼毫^{※けんごう}」です。種類ごとの毛の特性を理解し、混ぜ合わせた時の弾力の変化を把握していなければ思った通りの筆になりません。楷書、行書、草書、近代詩……筆の価値は書くものに依じた墨跡が出せるかどうかで決まり、値段では表せないと游哲氏は考えます。

例えば高校生が授業で使う筆は、初心者向けに扱いやすいブレンドで作ります。かつてはブレンドに失敗し、どうやっても修正できず泣く泣く捨てたこともありましたが、今では修正できないような失

※兼毫（けんごう）筆：さまざまな種類の毛を混ぜ合わせて作る筆

敗はなくなりました。「毛のブレンドを考え、頭の中の理想に近付けていく過程が一番楽しい」と、やりがいを語ります。

游哲の過去

物づくりが好きで、自動車整備士の仕事に就いた游哲氏。母が筆作りに関わる仕事をしていた関係で、筆問屋の社長から営



業の仕事に誘われました。そこで思い出したのが、かつて目にした伝統工芸士の姿です。

小学校の講演で、同じ町内に全国に誇る伝統産業を守っている伝統工芸士がいることを知り「なんてカッコいいんだろう。いつか自分もなってみよう」と憧れました。

時間が経ち自分でもその夢を忘れていましたが、社長の誘い

をきっかけに思い出し、筆作りの道に入りました。どちらかというと手先は不器用だったので最初は苦労しましたが、作業を覚えること自体にはそれほど時間はかかりませんでした。今では筆作りに重要なものは器用さよりもセンスだと感じています。

游哲の未来

游哲氏自身は試し書きをする程度ですが、父は書道の師範代です。使う人が身近にいることで「筆遣いを楽しんでもらえて、書く人の理想の線が出せる筆」を意識して追求しています。

伝統工芸ではよく後継者の確保が課題とされますが、熊野筆にはまず市場の開拓が必要だと感じています。販路があり収入が確保できれば後継者候補も出てくるはず。そのために自分た

ちがどのような思いやこだわりで筆を作っているのかを、エンドユーザーに伝える売り方や見せ方を提案しています。「伝統工芸を変えずに守り伝えるために、変わり続けることが必要なのではないでしょうか」。雅号に使った「游」の字には「形にとらわれない」という意味があり、そんな游哲氏の思いを表しています。



相応しい見せ方で新たな価値を

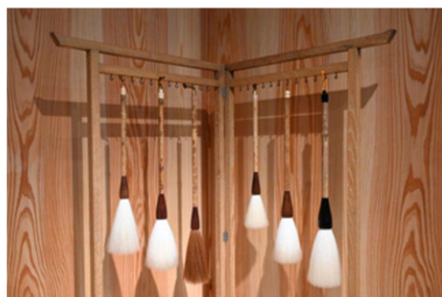
筆のあり方そのものへの挑戦



實森 得応

Sanemori Tokuo

伝統工芸士認定年月日：2013年2月25日



得応の今

「大量生産品もオーダー品も、買う人にとっては同じく1本の筆なんですよ」。得応氏の筆作りは常にそのことを意識

し、品質がぶれないよう見本を傍に置いて、芯の強さや書き味を何度も確認しながら作っていきます。繊細な小筆から両手で抱えるようなサイズの超特大筆まで、あらゆる大きさの筆を作ってきました。

書家自身は毛の種類などを知っているわけではないので、書体や書く字を教えてもらい、その人の気持ちを汲み取りながらレシピを考えます。

書き味と同時に、軸やダルマ[※]、骨[※]などの見た目やコーディネートにもこだわります。

※ダルマ：穂首と軸を固定する部分
※骨（こつ）：軸の終わりの部分

「道具としての筆の一步先をイメージしています」という言葉通り、手に取るだけで気持ちが高揚するような美しい筆を生み出し続けています。

得応の過去

實森家は1907年に、曾祖父である四郎氏が創業した歴史ある筆工房です。幼いころから



筆作りは常に身近なもので、後を継ぐことを意識しながら育ちました。県外の大学に通っていた際、「筆を作るなら書についても知っておこう」と通い始めた書道教室を通じて著名な書家と知り合ったことが、大きな転機となりました。

そこで書家から直接要望を聞きながら、筆作りの修行を始めた得応氏。人脈が広がり、作風



や筆の好みが全く異なる様々な書家と直接接した経験から、使い手に寄り添う筆作りを意識できるようになりました。

一般企業への就職も考えましたが、早いうちに経験を積もうと決心。卒業後はすぐに工房に入り、30代のうちに伝統工芸士の認定を受けました。

得応の未来

書き味を追求した筆はそれ自体が自然な機能美を備え、人の目を捉えます。得応氏は書家との交流や熊野筆のPR活動を通して、価値に見合った筆の見せ方を考えるようになりました。

店舗のディスプレイを提案すると同時に、自宅の一角を改装。ギャラリーを設置し、書き味と見た目を両立させた作品を1点ずつ展示しています。

海外では和傘や竹かごなどの

和雑貨が、観賞用として人気を集めています。筆も見せ方を工夫すれば、高級感のあるインテリアアイテムとしての可能性が出てくるはず。

「手間暇かけて作る1点ものだからこそ、より良く見てもらいたいですね。子どもから見えて夢がある仕事にすることが、熊野筆の未来にも繋がるのではないでしょう」と話します。



受注した書家の書体を徹底検証

理論的に作り上げる理想の筆

順敬の今

スタンドに立てかけたスマートフォンからラジオの音が軽快に鳴り響く中、真剣な面持ちで作業を進める順敬氏。昔から真空管ラジオや使い捨てカメラなどを分解しては組み立て、仕組みを理解することが好きでした。

書家から「この筆のこの部分を少しだけ長くしてほしい」「ほんの少し太くして」などというアレンジの要望を受けると、まずはインターネットで徹底してその書家の作品や書体を調べます。なぜその要望が出たのか、それによってどんな線が書ける筆が欲しいのか、どの毛をどの程度混ぜればそうなるか。



大久保 順敬

Okubo Jyunkei

伝統工芸士認定年月日：2018年2月25日

理論的に根拠を積み上げ、自信を持って提供できる筆を作ってきました。実演にも積極的に参加し、使う人の声を作品に取り入れています。

順敬の過去

高校卒業後、イタチ毛を得意としていた伝統工芸士の父から1年ほど小筆づくりを習い、筆



の製造会社に入社しました。職場は先輩の技を見て習うという世界でしたが、物づくりが好きだったためか吸収が早く、羊毛筆や兼毫筆などさまざまな筆の作り方を覚えました。試作を繰り返し、人一倍努力して早く仕事を覚えたといえます。

慣れてくると持ち前の探求心を発揮。他の産地や他社の筆を買ったり借りたりしてきて「売

れる筆作り」を研究しました。

伝統工芸士の認定を受けたあと40年ほど勤めた会社を辞めて数年前に独立。

今は自宅の工房で、江戸時代まで主流だった紙巻筆を分解・再現したり、菊芋の茎を軸に筆を作ったりと仕事の合間に研究にも勤しんでいます。

順敬の未来

順敬氏は全国の伝統工芸士会でさまざまな分野の伝統工芸士と関わる中で、道具としての筆は文化の礎であると考えてるようになりしました。漆工芸や焼き物、染め物の絵付けなどに、優れた筆は欠かせません。多様な伝統工芸を次世代へ継承していくため、筆業界全体で問題視されている原料の毛の確保に対し、国や行政が輸出国へ働きかけてく

れることを希望しています。

また後継者の確保も、文化継承の大きな課題です。会社では後進の指導にもあたっていましたが、筆作りには向き不向きがあり、一定以上のレベルに届く人は限られるといいます。

「彼らが安心して修行に打ち込むためにも、原料の確保にぜひ国が前向きに取り組んでほしいです」と、期待を寄せます。



手探りで一歩ずつ歩む

自分だけの筆作りへの道



井ノ下 恵峰

Inoshita Keihou

伝統工芸士認定年月日：2025年2月25日

恵峰の今

恵峰氏は筆作りを手掛ける工房に所属しており、主に筆の毛の部分にあたる「穂首」を制作しています。作る筆の種類によって何種類もの毛を組み合わせ、均等に混ぜ合わせて形を整える「上仕事」と呼ばれる工程です。

「前に作った筆と全く同じ配合で毛を混ぜても、前回と同じものはできません。そこを微調整していくところが難しいですね」。

ベテランになるにつれて、後継者不足が叫ばれる伝統工芸士の存在を意識するようになり、周囲からの勧めもあって認定試験の受験を決意しました。

それまで経験のなかった下仕事（毛の下処理）や仕上げ。担当の職人に何度も聞きながら時間をかけて習得し、厳しい試験を突破して伝統工芸士の認定を受けました。

恵峰の過去

熊野町に住みながら、それまでは筆づくりとは関わりのない



全く別の分野で働いていた恵峰氏。ある日新聞の広告で、「熊野筆マイスタースクール」の第1期生の受講者募集を目にしました。

「手に職をつけられれば転職に有利かもしれない」という気持ちから、思い切ってそれまでの仕事を辞めてスクールに入校。3ヶ月をかけて伝統工芸士の先輩方から筆づくりの基礎を学び

卒業後は現在も所属する工房に就職して筆づくりの世界に飛び込みました。

会社では筆の命ともいえる穂首作りを担当し、18年が経ちます。マイスター受講当時は夢にも思わなかった伝統工芸士として、熊野筆の伝統を守る立場になりました。

恵峰の未来

筆作りの実演や指導に行く
と、その工程の多さや粘り強い職人の姿勢に、必ず驚かれると
いいます。「ほとんどの方が『もっと筆を大事に使わんといけんね』と声をかけてくださるので、それを聞くと見てもらってよかったと思うんですよ」と、伝統工芸士の役割の一つである実演にも積極的に取り組めます。

18年間をかけて学んでも、筆作りには終わりがなく、まだ学ぶことばかりだと感じている恵峰氏。

「今はまだ目の前のことに精一杯で、自分が作りたい筆を考え、るところまでいっていません」と笑顔を見せます。自分だけの筆作りにたどり着く道を、一步步確実に歩んでいきます。



多くの名匠から受け継いだ教えを礎に

理想の筆を追い求める

紫香の今

「根元を糸で縛るこの工程。しない人はしないんですが、良い筆を作りたい一心から、私は先生の教えを忠実に守っているんです」。

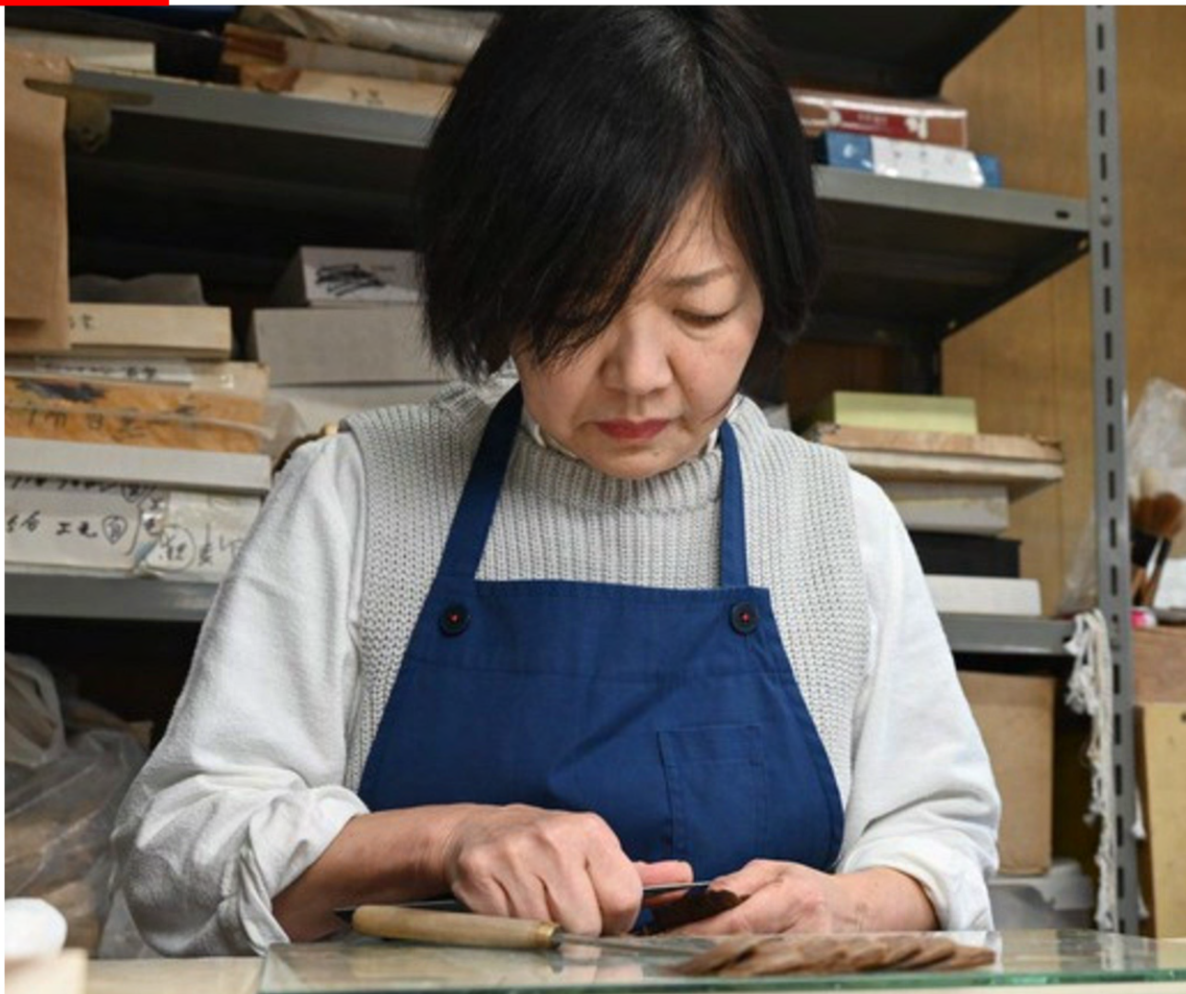
そう語る紫香氏が向き合うのは、最高級羊毛[※]の煮沸作業。毛の癖を取り脂を抜くこの工程は、筆の書き味を左右する重要な鍵です。大切な原料毛がばらけないよう根元を糸で縛り、まるで贈り物のように丁寧に布で包んだ毛に、細かく温度を調整しながらじっくりと火を通します。

このように、先人たちが磨き上げてきた知恵や技術を大切に守りながら筆作りに取り組む紫香氏の工房。代々守ら

篠原 紫香

Shinohara Shikyo

伝統工芸士認定年月日：2026年2月25日



※最高級羊毛：細微光峰、細光峰

れてきた無数の茶箱が保管されており、中には貴重な原毛が数多く眠っています。長年受け継がれてきた素材を生かしながら、教わった技術を忠実に守る。それが紫香氏の筆作りの根幹となっています。

紫香の過去

代々続く筆工房の家に生まれ



ながら、紫香氏が本格的に筆作りの道を歩み始めたのは40歳の頃でした。組合が主催する「筆司会」の募集を目にし、「うちの職人みんなに伝統工芸士の技を教えてあげたい」と、一から技を学ぶ決意をしました。「最初は九人の先生がいっちゃいましたが、今ではお二人になってしまいました」。異なる技やこだわりを持つ師匠たちから、

10

道具の扱い方や原毛の見分け方、その特性を生かす技術などを学んできた紫香氏。工芸士の先生方の助言を受けながら、一步步筆作りと向き合ってきました。遅咲きのスタートだったからこそ、先達が遺した言葉の重みを誰よりも敏感に感じ取り、ひたむきに技を磨き続けてこられたのかもしれない。

紫香の未来

紫香氏の現在の最大の関心事は、自分を育ててくれた熊野の技を生かし、より良い筆作りを追求することです。

注文の筆を作る合間を縫って工房が長年大切に守り続けてきた高級羊毛を使い、自分独自の作品制作にも取り組んでいます。また、伝統工芸士として恥じない実力を身に付けるべく、

今なお筆司会に通って、先輩工芸士に指導を仰ぎながら技術の研鑽を続けています。

長い年月の中で育まれてきた熊野筆の伝統。その技と心を次代へ伝えるため、紫香氏は今日も一本一本の筆と真摯に向き合っています。





中川 聖峰

Nakagawa Seiho

伝統工芸士認定年月日：1981年12月11日



熊野筆統一ブランドマーク Kマーク
商標登録 第5885422号
熊野筆事業協同組合は、一定の基準を
満たし組合に登録した組合員に対し、
Kマークと通し番号入りのシール「熊野
筆証紙」を発行。筆やパッケージに貼
られています。



伝統マーク 承認番号R5-090
産地組合等が実施する検査に合格した
熊野筆にはこの伝統マークを使った
伝統証紙が貼られています。



2026

発行／
熊野筆事業協同組合
協力／
熊野筆伝統工芸士会
熊野筆筆司会

〒731-4214 広島県安芸郡熊野町中溝3丁目13-19

URL <http://www.kumanofude.or.jp/>

TEL 082-854-0074